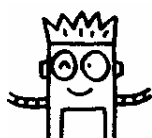


とくがわみつくに 徳川光圀は、どんな人だったの



「みとこうもん水戸黄門」のよび名で知られるみとはん水戸藩のはんしゅ藩主で、
「大日本史」という歴史書をつくらせた人だよ。

徳川光圀は1628年に、水戸藩の初代藩主徳川よりふさ いえやす頼房（家康の11男）の三男として生まれ、1661年に第2代藩主となりました。藩の政治に力を注ぎ、しっちたい湿地帯をうめ立てて、じょうかまち城下町を広げたり、上水道をつくったり、神社・お寺を整理したりしました。また、たびたび領内を回って、人々の生活の安定につとめ、ききんに備えるくら蔵を作り、紙・タバコ・漆などの生産をしょうれいしました。大きい船をつくって、えそち蝦夷地（北海道）との交易もしました。1690年に引退し、いんきょじょ隠居所のせい西山荘（さんそう ひたちおおたし常陸太田市）に住んで、1700年に73歳で病死しました。

「大日本史」をつくらせた

光圀の業績でいちばん有名なものは、全国から史料を集めて、「大日本史」という大がかりな歴史書をつくらせたことです。その史料を集めるために、日本各地を回ったのは、「助さん」のモデルといわれるさっさじっちく つうしょう すけさぶろう佐々十竹（通称は介三郎）たちです。また、集まった史料の整理にうでをふるったあさかたんぱく かくべえ安積澹泊（通称は覚兵衛）は、「格さん」のモデルといわれています。

水戸黄門のしよこくまんゆうばなし諸国漫遊話がつくられた

光圀は、引退すると、ちゅうなごん中納言という位をあたえられました。中納言は、とう唐（中国）のこうもんじろう黄門侍郎という役職にあたることから、黄門ともよばれていたため、光圀は水戸黄門とよばれました。江戸時代末期から、こうしゃくし講釈師（講談を語る人）などの人たちが、水戸黄門はすぐれたとのさま殿様であり、諸国を漫遊して、悪人をこらしめた、というお話をつくっていきました。これらのつくり話が、講談本やお芝居・映画・テレビドラマなどになっていったのです。

ことばの意味 漫遊 気ままに、各地をめぐり歩くこと。